様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ９ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３３９０５１４

研究課題名（和文）外国籍住民の文化を考慮した子どもの健康増進のための参加行動型研究

研究課題名（英文）A community-based participatory research in the aim of health promotion of Brazilian children in consideration of Brazilian culture

研究代表者
佐藤　由美（Yumi, SATO）

群馬大学・保健学研究科・教授

研究者番号：８０２３５４１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、ブラジル人集住地域において、子どもの健康増進をめざしたブラジル人住民との協働による参加行動型研究を実施することである。在日ブラジル人学校1校において教員との継続的な協議により以下を実施した。まず、子どもの体格と生活習慣に関する保護者の認識を質問紙により調査した。　その結果、子どもの肥満の状況と保護者の認識にずれがあること、保護者が子供の食事に関心が高いことが明らかになり、保護者会で食に関する健康教育を実施した。
　これらの取り組みを通じて子どもの食生活の実態と保護者の認識が明らかになり、さらに保護者の食に関する学習意欲が高まり、継続的な学習を希望した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to carry out a community-based participatory research in collaboration with Brazilians in the aim of health promotion of Brazilian children in the area of many Brazilian residents in Japan. We conducted the following with continuous discussions with teachers in one Brazilian school in the area. At first, we investigated the recognition of parents about the build of their children and the lifestyle using questionnaire sheets.
As a result, it became clear that there was a gap between the actual obesity situation of children and their parents' recognition, and parents cared very much about the dietary habit of their children. Based on this result, I provided the health education about dietary habit for parents at the Brazilian school.Through these activities, the actual dietary conditions of Brazilian children and their parents' recognition became clear. Furthermore, parents became motivated to learn more about dietary habit and requested continuous learning.

研究分野：地域看護学

キーワード：参加行動型研究　在日ブラジル人　子ども　健康増進

１．研究開始当初の背景

わが国には平成 21 年末現在で約 218 万人の外国人登録者がおり、総人口の 1.71%を占めている。特に、平成 2 年の出入国管理及び難民認定法改正以降、ニューカマーと呼ばれる労働目的の南米系日系人の流入が急増し、外国人集住地域が存在するようになった。わが国における外国籍住民、特に南米系日系人に関わる健康問題では、健康保険未加入による重症化してからの医療機関受診、結核やＨＩＶ等感染性疾患の発見の遅れや治療放置によるコミュニティ内での蔓延、日本社会への不適応や経済基盤の不安定さからくるメンタルヘルスの問題などがあげられる。中でも、子どもの健康や生活は保護者の生活や価値観に大きく依存しているため、保護者の生活により子どもの食事や睡眠等の基本的な生活習慣が乱れ、それが健康に影響している。それに対して，日本では、外国籍住民の課題分析や支援に関する研究はあるものの、地域における共生･協働の研究は充分でない。

２．研究の目的

本研究は、ブラジル人の集住地域において、外国籍住民の文化を考慮し、子どもの健康問題解決や健康増進をめざした当事者との協働による参加行動型研究 Community-based Participatory Research（以下ＣＢＰＲとする）を実施することを目的とする。取り組みのアウトカムとプロセスの評価により、当該地域における子どもの健康増進のためのＣＢＰＲの成果と課題、および方向性を検討する。

３．研究の方法

平成 21 年末（申請時）の人口に占める外国人住民の割合が全国第１位（15.7%,）であり、その多くが日系ブラジル人である群馬県大泉町を対象地域とし、大泉町にあるブラジル人学校１校を拠点として、教員と協働でＣＢＰＲに取り組んだ。この学校は、就学前教育（幼稚園 5 歳まで）、基礎教育（小中学校 6～14 歳 9 年制）、中等教育（高等学校 15～17 歳 3 年制）と 3 コ-ス編成で、母国の教育カリキュラムに基づいた教育を実施している。子どもの総数は約 150 名である。分析データは、教員や保護者等との協議の記録と、協議の結果に基づいて実施した保護者への質問紙調査の結果、保護者への健康教育後のアンケート結果とした。

４．研究成果

(1)在日ブラジル人の子どもの健康と生活習慣理解のためのフィールドワーク：

平成 24 年 9 月に、日系人人口が多いブラジルのサンパウロ州の 3 都市(アラサツーバ、リンス、サンパウロ）に研究分担者 2 名（中下、桐生）が滞在し、日系ブラジル人コミュニティの生活の参加観察と日本に滞在経験のある日系ブラジル人へのインタビュー調査を行った。それにより、日系ブラジル人の子どもの健康と生活習慣が、家庭や地域、学校生活の中でどのように形成されるかを文化的観点から把握し、来日して日本のコミュニティで生活する日系ブラジル人の子どもの健康増進において配慮すべきことなどを明らかにした。

(2)ブラジル人の子どもの健康増進のためのＣＢＰＲ実践

ブラジル人学校教員との継続的な協議を通じて、以下の取り組みを実施した。

①子どもの体格と生活習慣に関する保護者の認識の実態調査

これまでの活動を通じて、子どもに肥満が多いことが明らかになっていることから、子どもの体格及び子どもの食事や運動などの生活習慣に関する保護者の認識を、質問紙により調査した。調査時期は平成 26 年 11 月であった。保護者 96 名を対象にし、得られた 75 部から子どもの身長と体重が不明な者を除外し､有効回答は 71 部(有効回答率 74.0%）であった。

＜基本属性＞父との同居は 77.5%であった。国籍は、「ブラジル」が 92.7%であった。日本での居住期間は 1～25 年（平均 14.0 年）で、勤務「あり」は 96.4%であった。日本語の会話レベルは「日常会話はできる」63.6%、読み書きレベルは、「簡単な言葉が読める」40.0%が最も多かったが、読み書きが「全くできない」者も 34.5%いた。母との同居は 90.1%であった。国籍は、「ブラジル」が 95.3%で、日本での居住期間は 1～25 年（平均 13.0 年)､日本生まれの者は 1 人であった。勤務「あり」は 84.4%で、日本語の会話レベルは、「日常会話はできる」51.6%、読み書きレベルは、「簡単な言葉が読める」46.9%が最も多かったが、読み書きが「全くできない」者が 37.5%いた。子どもは兄弟含めて、合計 114 人で、一家族あたり 1～3 人（平均 1.6 人）であった。年齢は、0～25 歳（平均 9.6 歳）であった。国籍は、「ブラジル」が 91.2%であった。日本での居住期間は 0.2～20 年（平均 8.2 年）で、日本で生まれた子どもは 51.8%であった。子どもの日本語の会話レベルは、「全くできない」(37.7%）が最も多く、読み書きレベルは、「全くできない」（38.6%）が最も多かった。

＜生活習慣＞普段の食事は「作ることが多い」が 89.3%であった。食事で気を付けていることでは、「母国の食事を取り入れる」が 93.3%と最も多かった。　子どもの食事回数は、男子では未就学期と小学校期は 4 回が最も多く､中学校期以降は 2 回が最も多かった。女子では小学校期は 4 回が最も多かった。子間食について､男子で間食を「する」は約 80%で、中学校期以降の子どもは平均 2.4 回であった。女子で間食を「する」は 60～70%台であった。

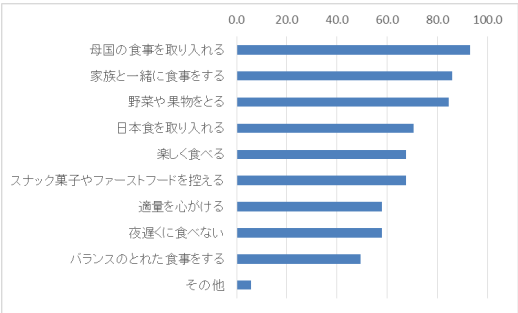

図１　食事で気を付けていること（複数回答,n＝71）

運動習慣では、男女とも小学校期と中学校期以降において約 60%の子どもに週に 1～2 回程度の運動習慣があった。
＜体格＞『児童生徒の健康診断マニュアル』に準拠し、肥満度＝［実測体重（kg）－身長別標準体重（kg)］／身長別標準体重（kg）×100（%）で計算し、肥満度が－20%未満は〈やせ〉、＋20%以上は〈肥満〉、それ以外を〈標準〉として判定した。その結果、小学校期の子どもでは男子の 80.0%、女子の 47.4%が〈肥満〉であった。
＜子どもの肥満に関する保護者の認識＞肥満の将来の影響について、子どもの肥満度に関わらず「やせも肥満も将来の健康によいことではない」と 86.2%以上が回答した。しかし、肥満度別に自分の子どもの体格についての認識を見ると、正しく認識していたのは、〈標準〉の子どもを持つ保護者が 78.0%、〈肥満〉の子どもを持つ保護者が 62.1%であった。中でも、〈標準〉の子どもを持つ保護者の 14.6%は、子どもの肥満度を「やせぎみ」と回答し、〈肥満〉の子どもを持つ保護者の 34.5%は、子どもの肥満度を「ちょうどよい」と回答した。今後の子どもの体格について、〈標準〉の子どもを持つ保護者のうち 9.8%は「太らせたい」と回答し、その理由として「食べてほしいものを食べてくれない」「まだ小さいので、少し太ってほしい」「とてもやせているから体力不足」等であった。また、7.3%は「やせさせたい」と回答し、その理由として、「健康に悪い」「普通だから」であった。一方、〈肥満〉の子どもを持つ保護者では、55.2%は「やせさせたい」と回答し、その理由として、「体重が理想的でないから」「将来の健康のため」「過体重は日常生活に影響を与えるから」「すぐ疲れるから」等であり、44.8%は「維持したい」と回答し、「健康だから」「幸福そうに見えるから」「適切な身長・体重だから」等であった。
＜健康に関する関心＞全ての肥満度において保護者の 78%以上が専門職による健康相談や教育の機会を「希望する」と回答し、その中でも、食事に関する希望が多かった。
②食生活に関する健康教育の実施
上記の結果を受けて、ブラジル人学校教員と協働で食に関する健康教育を企画し、学校の定例保護者会の時間に、以下のような内容の教育を実施した。
テーマ：バランスのよい食事は健康食！
目　的：バランスのよい食事について子どもの保護者が正しく理解することで、子どもを含めた家族のバランスのよい食事管理につなげる。
実施日：平成 27 年 7 月
実施場所：ブラジル人学校の教室
対象者：9-12 歳の保護者 45 人、13-17 歳の保護者 45 人
実施内容：栄養素と年齢別の必要量、3 食の食事の組合せ例
評価方法：自由記載によるアンケートを実施。
アンケート結果では、子どもの食事バランスに注意したい、食事の選び方がわかったなど、実践的な学修ができたという反応が多くみられた。また、ブラジルの食事と日本の食事を組み合わせた自分たちが利用しやすい食教材を求める声や、食に関する教材作りに専門家と共同で取り組みたいという意欲を示した声も上げられ、今後の継続的な学習への希望が確認された。

以上から、今後の自主学習化に発展させるための仕組みづくりや教材開発支援の必要性が明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）
〔学会発表〕（計 3 件）
①<u>中下富子</u> 他、ブラジルに在住する日系ブラジル人の学齢期の子どものいる家族における日常生活の特徴、第 7 回文化看護学会学術集会、2015 年 3 月 22 日、群馬大学(群馬県前橋市).
②鈴木さや 他、在日ブラジル人学校に通う子どもの体格に対する保護者の認識、第 7 回文化看護学会学術集会、2015 年 3 月 22 日、群馬大学(群馬県前橋市).
③<u>中下富子</u> 他、ブラジル在住の日系ブラジル人における学童期・思春期の子供の健康生活に関する実態、第 73 回日本公衆衛生学会総会、2014 年 11 月 6 日、宇都宮東武ホテルグランデ（栃木県宇都宮市).
〔図書〕（計 0 件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）
〔その他〕　なし

６．研究組織

(1)研究代表者
佐藤　由美（SATO, Yumi）
群馬大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：８０２３５４１５

(2)研究分担者

結城　恵（YUKI, Megumi）
群馬大学・大学教育・学生支援機構・教授
研究者番号：５０２８２４０５

井出　成美（IDE, Narumi）
群馬大学・大学院保健学研究科・准教授
研究者番号：８０２４１９７５
（平成 25 年度から）

桐生　育恵（KIRYU, Ikue）
群馬大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号：００４４８８８８

松井　理恵（MATSUI, Rie）
群馬大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：６０７３６２５３
（平成 26 年度から）

齋藤智子（SAITO, Tomoko）
新潟大学・医歯薬系・准教授
研究者番号：００３０００９６

中下富子（NAKASHITA, Tomiko）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：５０３９８５２５

山田淳子（YAMADA, Junko）
群馬大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号：６０４３１７１４
（平成 25 年度まで）